過去帳に関する二、三の考察

―再び川越『仏地院過去帳』の「叙」「縁起」を中心として―

研究員　山口　興順

埼玉県川越市仙波の天台宗中院は、中世においては仏地坊・仏地院と称し、仏蔵坊（北院・喜多院）、地蔵坊（南院、廃寺）とともに無量寿寺（仙波談義所）を形成する関東天台の中心的な談義所であった。

仏地院はいくつも自らの学統に属する寺院を擁しており、その人と学問のルートは専ら各学僧の伝記や談義書の奥書によって確認されてきたが、筆者はかつて『仏地院過去帳』（中院蔵）を分析する新たなアプローチを提示した（『天台学報』四八・『仏教文化学会紀要』一六）。

すなわち本過去帳は、冒頭の「叙」が高名な学僧であった北院実海によって書かれた永正十一年（一五一四）から日牌式霊名簿の最終年次である正徳年間（一七一一～一六）ころまで書き継がれたもので、霊名簿にみられる日本人僧侶計四一一名のうち談義所・学問寺とされる寺院に所属していた僧侶の分布はほぼ関東全域に及んでいるが、特に国別では武蔵・上野・下野・常陸の登場頻度が高く仙波が専門とした恵心流天台学が盛行したとされる地域とほぼ重なり、また寺院別では武蔵金鑽談所と上野渋川談所の僧数が多く両所を仙波直系とする通説を傍証すると思われた。

さらに本過去帳の場合、書式まで関連寺院が継承するという事例が見出された。すなわち日光輪王寺過去帳、前橋慈照院過去帳、叡山文庫真如蔵蔵本（別行）、鎌倉宝戒寺過去帳、狭山広福寺過去帳が実海叙を採り入れており、その関係の深さを明示していたのである。

今回の発表ではさらに、茨城県稲敷市不動院過去帳、同市円密院過去帳、日光輪王寺『日光山常行三昧堂新造大過去帳』、天台宗東京教区第四部地蔵講過去帳の四例を追加することができたが、不動院・輪王寺・地蔵講のそれには「叙」のみならず「縁起」まで踏襲されていた。

また今回紹介した『過去帳年月明鑒』は、おそらく浄土宗門によって万治二年（一六五九）に刊行された過去帳作製の手引書であるが、序文の一例として実海叙があげられている（ただし無記名）ことが判明、さらに了誉聖冏の序の前半部が実海叙と近似すること、本書「生起」段が『仏地院過去帳』「縁起」と部分的に相似することも分かった。

このような『明鑒』と『仏地院過去帳』の関連性についてはさらなる考究を要するが、両者が成立した時期は、寺檀制度や諸宗の本末制度が確立され浸透していった時期である点に注目したい。

すなわち、寺檀制度の基礎台帳として必要とされたのが宗旨人別帳と過去帳であった。また本末制度の確立によって、中世までは比較的緩やかで流動的でさえあった寺院の相互関係・上下関係が固定化された。こうした中で、『明鑒』のような過去帳の雛形が出現し、また同時に、仏地院（中院）のような系統を代表する寺院の過去帳を手本とする傾向も加速されていったのではないかと考えるものである。